

5月24日 聖霊降臨 ヨハネ20章19～23節 世の終わりまでともにいる霊

主の昇天の次の主日が聖霊降臨です。ユダヤ教では過越祭から五十日目にあたる日を五旬祭として祝いますが、復活から五十日目に聖霊が降ったということで、ギリシア語で五十番目の日を表す「ペンテコステ」とも呼ばれています。

今月の福音でイエスが予告していた聖霊の到来が実現しました。とはいえ、五旬祭の出来事は第一朗読の使徒言行録で読まれます。しかし、今日のヨハネの福音では、五旬祭どころか復活後にイエスが弟子たちに現れたときに息を吹きかけて聖霊を与えられています。イエスさん、フライングですか！？まあヨハネの福音書はイエスのみことばを中心に、出来事が起きた順番に記されているのではないので、後先にはこだわらないほうがいいでしょう。そしてそこにトマスはいなかったのだから、彼は聖霊をその時点では受けていないことになりますね。むしろ、復活したイエスとの出会いと聖霊の働きが分かちがたいことを表しているのではないのでしょうか。

聖霊を表すしるしは二つの朗読で異なっています。福音では、イエスは息を吹きかけて「聖霊を受けなさい」と言われます。「息」はいのちの象徴でもあります。そしてそれが、イエスから「神からのいのち」として与えられます。イエスご自身がその人のうちに来られるというしるしであり、「あなたがたをみなしごにしておかない」と言われたことの実現であるといってもいいでしょう。

一方、五旬祭の際の聖霊は、「風の音」が聞こえたあと「炎の舌」が弟子たちひとりひとりに降った、ということです。風は霊のシンボルであり、よどんでいる空気を新たにします。炎は熱情、舌はことばを表します。そのとおり、聖霊を受けた弟子たちは、今までとは変わって熱意をもって語り始めます。いろいろな言葉を語ったのは、熱意をもって各地に教えを伝えていったこととしるし、「弁護者」の働きだと考えられます。

福音では、最後に罪のゆるしについて語られます。「あなたがたが赦せばその罪は赦される」と言われると、弟子たちと教会に罪のゆるしの権限が与えられているように思われます。しかし、「神が赦しても教会が赦しません」という可能性があるのはおかしいですね。むしろ、イエスは「あなたがたはイエスのあがないによって赦されている」ということを伝えなさい、という意味で言われたのではないのでしょうか。「罪の重荷に苦しんでいる人に、神の赦しを伝えなさい、あなたがたが伝えないとその人は神の赦しと愛を知らないままに苦しみますよ」ということだとわたしは考えています。

「世の終わりまであなたがたとともにいる」というイエスのことばは聖霊降臨によって実現しました。「世の終わりまで」ですから、弟子たちだけでなく、わたしたちにも向けられていることばです。わたしたちも、この喜びをまわりの人々と分かち合うために神の霊をいただいているのです。

(柳本神父)